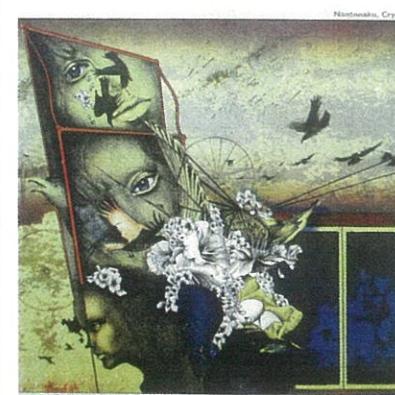




## Album Review “NANTONAKU, CRYSTAL” 小説の世界を踏まえて選ばれた珠玉のAORコンピレーション

**19** 81年5月に公開された映画『なんとなく、クリスタル』のサウンドトラック盤は、AORと呼ばれる音楽の魅力を凝縮した1枚だ。ここには、ビギナーが楽しめる大定番も、中級以上のマニア——特に、輸入盤店に足繁く通い、いち早く名作を発掘、発見したい人たち——がニンマリするお宝も散りばめられている。それでもひとつ重要なことは、決してサウンドのカラーがひとつではない、非常に多岐にわたっている、という部分だ。AORはジャンルではなくティスト、カテゴリーであり、曲によってジャジーだったり、ソウルフルだったり、ロックだったり、とヴァラエティに富んでいるが、共通して言えるのは、品が良く洗練されている、ということ。田中康夫氏も語っていたが、決して押し付けがましくない音楽で、声高にメッセージするのではなく日常にふわっと溶け込む感。それが重要であり、このサントラ盤にはそういった曲が厳選されて収められている。

それでは1曲目から聴いていこう。オープニングを飾るのはこのサントラを、そしてその映画の象徴的なイメージを持つ、ポール・ディヴィス〈I Go Crazy〉。元々は1977年発表の楽曲で、全米最高7位を記録し、しかも実に40週間チャート・インしたロング・セラー的ナンバーだ。アルバム『Singer Of Songs - Teller Of Tales』の1曲目に収められていたが、意外にもリアルタイムでは日本盤は発売されておらず、『なんとなく、クリスタル』で注目されたことからこのサントラと同じ1981年に『アイ・ゴー・クレイジー』の邦題、そして、美しいイラストのジャケットで日本盤が発売された。



オリジナル・サウンドトラック  
『なんとなく、クリスタル』

CBS / Sony : 28AP2010 Release Year : 1981

(A) ① PAUL DAVIS – I Go Crazy ② RANDY VANWARMER – Call Me ③ TOTO – 99 ④ THE ISLEY BROTHERS – Young Girls ⑤ BOZ SCAGGS – We're All Alone  
(B) ① STEVE GIBB – Tell Me That You Love Me ② DAVID POMERANZ – The Old Songs ③ BOZ SCAGGS – You Can Have Me Any Time ④ JIMMY MESSINA – Seeing You (For The First Time) ⑤ WILLIE NELSON – Moonlight In Vermont

2曲目はランディ・ヴァン・ウォーマーの〈Call Me〉。ランディというと、世界的なヒットを記録した〈Just When I Needed You Most〉を入れてくるところだが、そこにいかず、同じアルバム『Warmer』(1979年)に収められたそのバラードをセレクトしているところが素晴らしい。イノセントなヴォーカルが堪能できる彼らしい作品だ。

3曲目はTOTOの2作目『Hydra』(1979年)からのヒット・シングル、〈99〉。ハードなロックも得意な彼らだが、メロウな部分が最も良質な形で發揮された1曲で、多くのファンを虜にした。メロウながらタイトなリズム・セクションはまさにこの当時のTOTO

ならでは。ちなみに、このサントラにはアルバムよりも1分半以上短いシングル・エディットが収められている。

4曲目はアイズレー・ブラザーズ〈Young Girls〉。このサントラと同じ1981年に発表した『Grand Slam』収録のミディアム・アップ・チューンで、トレードマーク的なディストーションの効いたギター・ソロは入っているが曲の質感は極めて滑らか。アメリカではシングルになっていないが、本作に収録されたことから日本ではシングルが発売された。

そしてLP時のA面最後は説明不要のボズ・スキヤッグス〈We're All Alone〉。1976年の名作『Silk Degrees』に収められた定番バラードが1981年にまた注目を集めただけでなく、この曲が冒頭に登場する。主人公の由利が目覚めにステレオの電源を入れFENに合わせるとそこから流れてきたのがその曲だった、そんなシチュエーションが思い浮かんだことから小説を書き出したと語る田中康夫氏にとって、この曲の持つ意味、思い入れは、普通のリスナーの比ではないほど深いことだろう。

「音楽は、素敵な気分を運んでくれる水色の風……」  
「超一級のナンバーぞろい。アルバムとして聴けば、もちろんクリスタル・フィーリングであると同時に、一曲一曲が心にじんとしみるスピリットを持っている。まさに夢の企画の実現だ」

これがサントラ盤のキャッチ・コピーで、今まで一度もCDにはなっていないが、このアルバムはアナログ盤で、AB面、ひっくり返してターンテーブルに乗せるのが正しい聞き方かもしれない。ピュアな心はいつまでもあの時代のままでいたいから… ■

Anytime〉で、続く4曲目がジム・メッセイナのソロ・デビュー作『Oasis』(1979年)から〈Seeing You〉。このなんとも言えぬ緩やかな空気感は、レイド・バック、という一語では片付けられない奥深さを持っている。そして、シングル曲ではなくアルバム・トラックであり、今こそ大定番になっているが、当時、この曲に目をつけサントラにも収録したこととはまさに“センス”的な良さであり、これを定番化させたことも『なんクリ』の功績のひとつだと思っている。

そして、アルバムのラストはウィリー・ネルソンの〈Moonlight In Vermont〉。1978年に発表したスタンダード集、『Stardust』からのセレクトで、プロデュースはブッカー・T・ジョーンズが担当。この曲をAORと捉えるのが田中康夫氏の世界であり、なにより、小説『なんとなく、クリスタル』ではこの曲が冒頭に登場する。主人公の由利が目覚めにステレオの電源を入れFENに合わせるとそこから流れてきたのがその曲だった、そんなシチュエーションが思い浮かんだことから小説を書き出したと語る田中康夫氏にとって、この曲の持つ意味、思い入れは、普通のリスナーの比ではないほど深いことだろう。

これがサントラ盤のキャッチ・コピーで、今まで一度もCDにはなっていないが、このアルバムはアナログ盤で、AB面、ひっくり返してターンテーブルに乗せるのが正しい聞き方かもしれない。ピュアな心はいつまでもあの時代のままでいたいから… ■



## 元レーベル洋楽部ディレクターによる回想

『なんとなく、クリスタル』の背景にあった新しい音楽カテゴリーの始まりと定着  
文◎田中敏明

**19** 70年代後半から1980年代にかけて、私はワーナー・パイオニア～ワーナーミュージックで洋楽ディレクターをしていた。

1975年、マイケル・フランクスは『アート・オブ・ティー』を発表した。都会的にソフィスティケイトされたジャジーな感覚と斬新なポップ・センスは、従来のシンガー・ソングライターとは明らかに一線を画していた。

ちょうどMOR（ミドル・オブ・ザ・ロード、一般にポップスを指す）という言葉が死語となって、AORが台頭しつつある時代だった。但し、未だAORという言葉が“アルバム・オリエンテッド・ロック”として認識され始めた時期で、当初は“アダルト”的ニュアンスは含まれてはいなかった。

1977年春、マイケル・フランクスはワーナー・ブラザーズの2作目のアルバム『スリーピング・ジプシー』をリリース。洋楽ディレクター2年目を迎えていた私の勝負作がこの作品だった。レーベルから送られてきたカセット・テープを聴いて、ボサノヴァの巨匠アントニオ・カルロス・ジョビンに捧げられた〈アントニオの歌〉の素晴らしさに魅了され、日本独自にシングル・カットして、ラジオでもオンエアを狙っていた。

〈アントニオの歌〉はかまやつひろしさん、南佳孝さん、丸山圭子さんなど後年シティ・ポップの担い手としてクローズアップされるニューミュージックの人気アーティストがラヴィで歌っていて、私は会場に足を運んで観客のリアクションに直に触れ、この曲が新たなスタンダードになることを確信した。



当時音楽誌「アドリブ」の編集長だった安藤和正さんの呼びかけで、レコード各社の洋楽部が“ソフト&メロウ”路線を打ち出していたが、ワーナーではジョージ・ベンソン、スタッフ、アル・ジャロウ、ジョアン・ジルベルト、マイケル・フランクスのような、一連のトニー・リビューマ・プロデュース作品を“ヤング・アダルト・ミュージック”と銘打ってキャンペーンを展開した。

ヤング・アダルト(YA)というと、出版社や図書館では中高生のティーンズを指す言葉だが、ワーナーのキャンペーンのターゲット層は20代前半あたりの学生～新社会人を狙っていた。

いち早く音楽に“アダルト(コンテンポラリー)”の概念を取り入れたワーナーは先見の明があったのかもしれない。

しかし、会社の展開とは裏腹にもっとかっこいい売り方を私はマイケル・フランクスに求めていた。それは“シティ・ミュージック”という新しいカテゴリーの創出で、日本でムーヴメントを作りたかったのである。

他社ではスティーヴン・ビショップ、ベン・シドラン、ルパート・ホームズなどがいたが、各社の思惑が異なり、なかなかレーベルを超えた展開は難しかった。

特にトニー・リビューマがプロデュースしていたニック・デカラをマイケルと一緒に紹介してシティ・ミュージックの特集を組んで盛り上げてもらうため、当時国内盤が未発売だった『イタリアン・グラフィティ』の輸入盤を個人的に購入してラジオ局のディレクターに配ったりした。

当時CBSソニーの洋楽部でヘッド・ドヒニを担当していた森下彰夫さんとはシティ・ミュージックのブームと一緒に作っていました。こうと唯一意気投合したものである。



マイケル・フランクス初来日時の告知

1977年9月、マイケル・フランクスは恋人のクローディアを伴って初来日を果たし、コンサートは超満員の観客を動員した。

ツアーハンディアの間に赤坂の日枝神社で古色蒼然たる羽織袴に着物の出立で、雅楽の厳かな調べに包まれて二人は挙式を挙げている。そして、二人だけのお忍びのハネムーンに奈良を選び、その時の情景は翌78年のアルバム『Burchfield Nines (シティ・エレガанс)』の中の〈Meet Me In The Deerpark (鹿の園で逢いましょう)〉に描かれている。

また、1983年のアルバム『パッションフルーツ』収録の〈Rainy Night In Tokyo (東京の夜は雨)〉の中で9月7日に結婚した思い出をはっきりと歌っている。

私はマイケル・フランクスのシティ・ミュージックをプロモーションで表現するのに、よく“Situation Music”(シチュエーショング・ミュージック)という言葉を使った。

都会の大人的男女のドラマのように機微あ



る生活の場面、断面で状況に溶け込む音楽というニュアンスだった。それはアメリカの都会的な短編小説の名手、アーウィン・ショーンの「夏服を着た女たち」のお洒落な感覚に通じるもので、東京では六本木や原宿あたりに続々とオープンして人気を呼んだカフェ・バーにとてもマッチした音楽だった。

もっともマイケルはインタビューで「シティ・ミュージックという言葉はアメリカにはないよ。あえて言うならアーバン・ミュージックかな」と発言していた。

マイケル・フランクスのシティ・ミュージック・ブームは来るべきAORブームの先駆けになったという自負がある。

私はその後、マーク・ジョーダン、スティーヴン・ビショップ、クリストファー・クロス、ビル・ラバウンティ、マイケル・センペロ、ドナルド・フェイゲン、ラーセン・フェイトン・バンド、アレッシーなどのAOR系アーティストを数多く担当したが、マイケル・フランクス

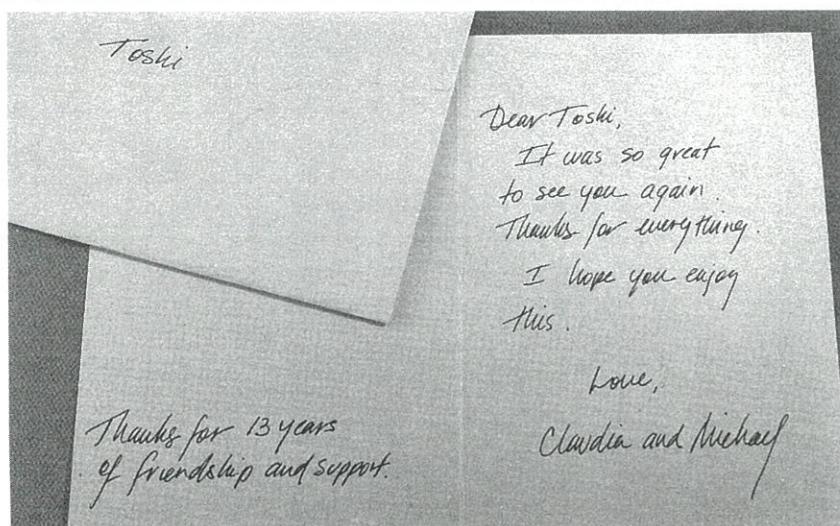
で実現したささやかな成功はその後のAORアーティストのプロモーションの基本となった。

「ニューヨーク・シティ・セレナーデ」が大ヒットして、クリストファー・クロスの『アナザー・ページ』はオリコン総合アルバム・チャートで初登場No.1の快挙を成し遂げ、エア・サプライと並びAOR最大のセルスを実現できた。

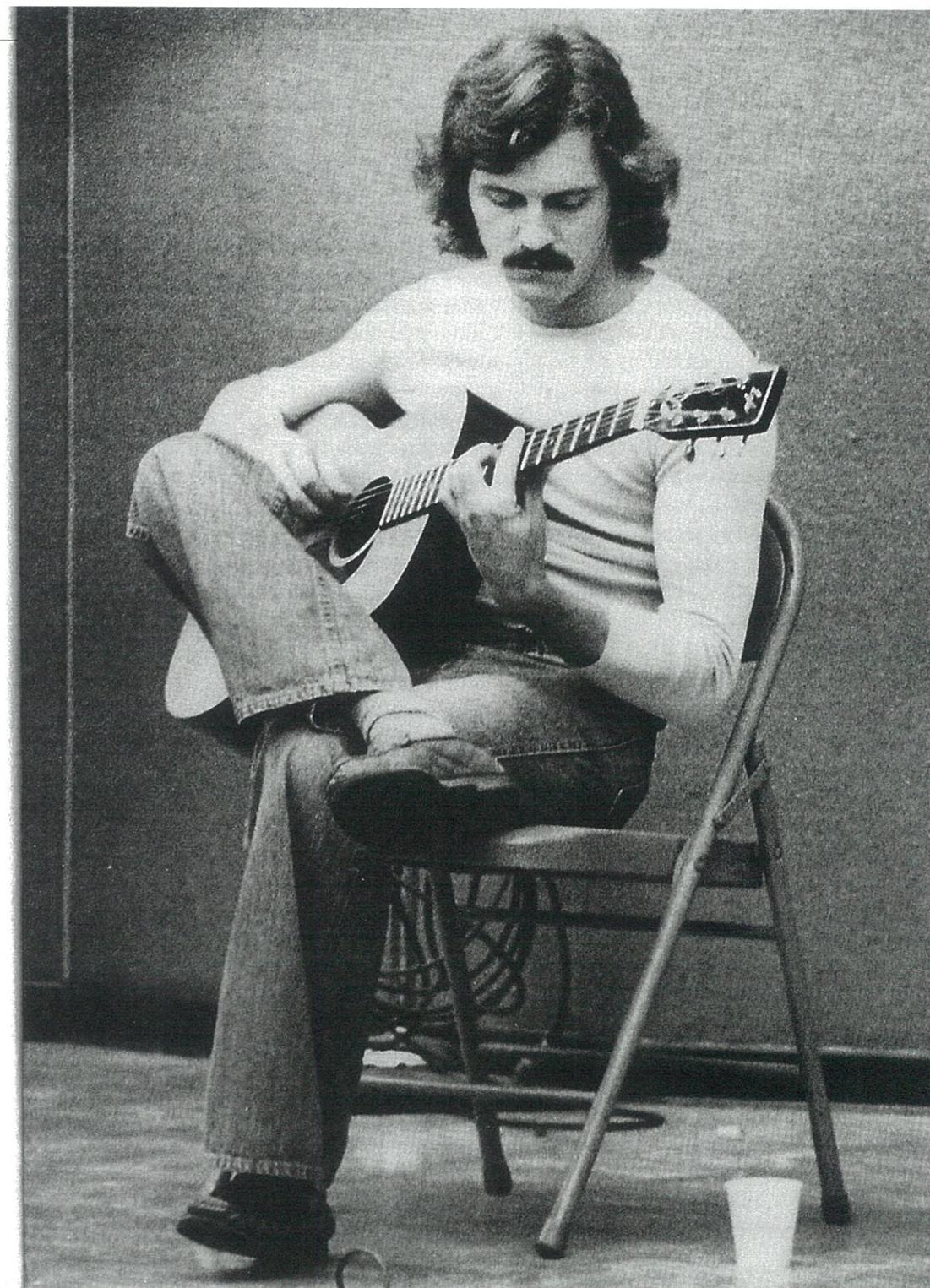
洋楽ディレクターとして担当した数多いアーティストの中で、AOR系のアーティスト達には今でもひときわ深い愛着を抱いている。

1981年、『なんとなく、クリスタル』で文藝賞を受賞した田中康夫さんとは出版社を通じてお会いし、ビル・ラバウンティなど担当していたAOR系アーティストのライナーノーツを依頼したり、宣伝用パンフレットに推薦文を書いていただいたりした。

氏の『たまらなく、アーベイン』(1984年)の後書きに名前を掲載していただけたことは限りなく光栄な、忘れられない思い出である。■



マイケル・フランクス夫妻から田中氏に宛てた手紙





# 元『ADLIB』副編集長が振り返る 田中康夫の作品と歩んだ40年

文◎山崎稔久

## 共感を覚えた『なんなく、クリスタル』

当時は社会現象になるほど話題となった、1981年に刊行の『なんなく、クリスタル』。そこにたくさんのミュージシャンが羅列されていたことには、多くの洋楽ファンが歓喜したのではないか。それまで、音楽雑誌などでしか取り扱われなかった活字化された名前が、なんとベストセラーソノビに刻印されたのだから…。女子大生がクリストファー・クロスやエアサプライのレコード・ジャケットを裸で小脇に抱え、キャンパスを闊歩するというような、現在では考えられない光景さえもが現実の世の中だったのだ。

そんな『なんクリ』は、ウィリー・ネルソンの〈ムーンライト・イン・バーモント〉から、ジミー・ヘンリックの〈シーリング・ユー〉まで、ほとんどがAC（アダルト・コンテンポラリー）系の、約40アーティストが掲載されているが、ポール・デイヴィスの〈アイ・ゴー・クレイジー〉やスティーヴ・ガブの〈テル・ミー・ザット・ラヴ・ミー〉など曲名が具体的に表記されたものもあれば、マイケル・フランクスやケニー・ランキンなど、アーティスト名だけで曲名のないものもある。そこを、あの曲かこのアルバムかなどと想像することも楽しみのひとつだった。例えば、ケニー・ロギンスならば、注記にある「『ナイトウオッヂ』は、特に目覚め用」という記述から、「さわやかな9月の朝がやってきて」と歌われる〈ウェイト・ア・リトル・ホワイル〉ならハッピな気分になれるのではないかなど。

その頃のラジオ番組で、この小説からの

楽曲を特集したものを、いくつか聴いた記憶はあるけれど、いずれもサウンドトラックからのチョイスだったり、せいぜいスティーヴン・ビショップの〈オン・アンド・オン〉や、エアプレイの〈シー・ウェイツ・フォー・ミー〉などがオンエアされる程度の状況には、物足りなさを感じていた。

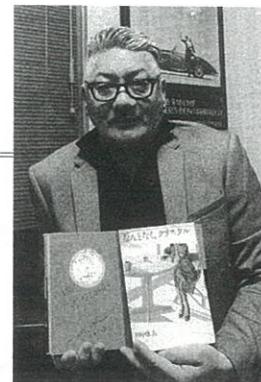
自分で選曲したカセット・テープで、リアルなサントラ盤は作れても、配布する数は限られている。いつか多くのリスナーに届けたい…そんな夢か叶ったのが、2010年から選曲を担当するFM番組『ナイトフライ』(K-MIX)だった。週に1度の60分番組で、2週に渡り特集できたことは、今ではいい思い出となった。

発刊当初はブランド小説と評された『なんなく、クリスタル』。フードやプレイス、ファッショニもさる事ながら、日本の四畳半フオーカを嫌悪し、フュージョンは肯定。何よりもここに登場する素敵なお酒を自ら進んで求めるヒロイン：由利のキャラクターの立ち方やセンスの良さに好感を抱いた、由利より1つ年下の、読者の自分がそこにいた。

## 著者への信頼感を深めた 『たまらなく、アーベイン』

そんな類稀なる洋楽の知識を持つ、作家：田中康夫を、さらなる博識者であることを認めさせられたのが、『たまらなく、アーベイン』だ。

お得意の若者カルチャーを紹介した、東京ガイドブック的内容だが、モーニング～アフトヌーン～イヴニング～ナイトのシチュエー



ション別に100のコラムで構成。それぞれにテーマ・アルバムが設定されているだけにとどまらず、参考アルバムとして優に800枚以上のアルバムが羅列。しかも、嬉しいことに各作品が5段階で評価されていた。

1984年といえば、ACやBCM（ブラック・コンテンポラリー）など、すでに自分自身の音楽的嗜好は確立されていたとはいえ、まだまだ未知の世界でもあり、ミュージシャンの名前は知っていても聴いたことがない、というような作品があって、出会いの機会を増やしてくれたのは、紛れもなくこの書籍のおかげ。また「あなたの持っているレコードから一枚だけ選びなさい」と言わされたら、迷わず、これと差し出すのは、きっと、キャロル・ベイリー・セイガーの『サムタイムス・レイト・アット・ナイト』という一文を読んだ時は、思わず声が洩れたほど。自分もまったく同感であったため、著者への信頼度をますます深めていった。

その6年後に文庫化された『ぼくだけの東京ドライブ』で、上京していた自分が再会した時も、ショッピングやドライブ・コースに併せて、音楽の紹介部分を再確認。テーマ・アルバムはもちろん、参考アルバムの多くが駄作なし。自分の好きな方向性が明確になったことも教えてくれた。とにかく与えてくれた刺激は相当大きくて、そんな個人的な衝動は、91年に『ADLIB』の別冊『AORハンドブック』を創るキッカケとなつた。

## 不变の“皮膚感覚”を確認した 『33年後のなんなく、クリスタル』

### 『もとクリ』に対しての『いまクリ』。

20代の頃に観たテレビ番組『笑っていいとも』のレギュラー出演でのコメントは毎回興味深かった。また、長野県知事として登庁した際に、名刺を受け取った職員が折り曲

げた、別の番組で観た映像には立腹したものだ。阪神・淡路大震災後、自分が学生時代に過ごした神戸の街を、原付バイクに跨り、水のいらないシャンプーを届ける姿には涙した。議員時代や小説、コラム、訳書など、過去のいろいろなことを思い起こしながら読み進んでいくと、最終8項目前に音楽を語る場面が登場して安堵する。

マーク=アーモンド、トニー・リピューマ、ニック・デカラ、ルパート・ホルムズなど、いつもながらの良質な音楽を、時代を超えて紹介してくれたのは痛快だった。主人公：ヤッキーの言葉を借りれば「しなやかな感受性を持った人たちの音楽」「皮膚感覚」「AORはぜんぜん古くなく、むしろ今こそ光り輝き魅力的」。そんな表現には大きくなづけるし、新装され同時期に発刊された『たまらなく、アーベイン』に三度触れて、そんな想いは変わらない。

経年するほどに光沢を増すという音楽のマジックは、同時にその時へとタイムスリップする効力もある。カッコいい音楽に恥じない、AORが似合うライフスタイルを心がけていた学生時代。ロバート・ペーマーやブライアン・フェリーのような、スーツが似合うナイス・ミドルを目指していたのに、あれから40年以上も過ぎると、ちょいワルなイタリア・オヤジを気取っても、ほんワル（腰痛）なイタいオヤジと化してしまった（トホホ）。それでもこれまでの人生、事あるごとにAORのメロディが流れていたのだから、きっとこれから、死ぬまでそうだろう。

こんなにも素晴らしい音楽を、自分が最も多感な時期に出会えたことは感謝だし、そんな音楽を、頭の硬い評論家のバッシングにも負けず、環境を整え、根強く支持してくれたパイオニア的な田中康夫の存在は、あまりにも大きい。